

# 政治が世代を語るとき

## When Politics Discusses Generation

### 1960年代保守主義からみた若者世代

#### Conservatism and the Youth in the Sixties

森山貴仁  
MORIYAMA Takahito

## 1. はじめに

2020年にアメリカ大統領選挙戦が本格化するなか、2月にジャーナリストのシャーレット・オルターは『我々が待ち望んでいた者たち』(*The Ones We've Been Waiting For*)を上梓して、ミレニアル世代がアメリカ政治をどのように変えうるのか考察した。このタイトルは2008年の大統領選におけるバラク・オバマの言葉で、変化は自分で起こすものなのだと、彼の選挙陣営を支えた若者たちを鼓舞したのだった。2020年にはミレニアルと呼ばれるアメリカ人が、親世代のベビーブーマーを投票者として数で上回るようになり、若い世代の動向が注目されている。また、政治家のなかでも新しい世代の台頭が見られ、民主党ではアレクサンドリア・オカシオ＝コルテス (Alexandria Ocasio-Cortez, 1989-) やピート・ブティジェッジ (Pete Buttigieg, 1982-)、共和党でもダン・クレンショー (Dan Crenshaw, 1984-) やエリース・ステファニク (Elise Stefanik, 1984-) などがいる。現在は新世代がアメリカ政治において存在感を高めている時代のなかにあり、多くの場合、ミレニアルは何かを変える人々として期待されているのである<sup>1</sup>。

ミレニアル世代は、社会学者や政治学者の関心も引いてきた。作家のウィリアム・ストロースとニール・ハウが1990年代から広めた「ミレニアル世代」という用語は、論者によって様々な定義がなされるが、おおまかに1980年から2000年の前後に出生した集団を意味することが多い<sup>2</sup>。全体的な特徴と

してミレニアルはリベラル色が強く、政治学者のアンジェ＝マリー・ハンコックによれば、ミレニアル世代はベビーブーマー世代よりも政治参加の傾向がずっと強く、人種、階級、ジェンダー、性的指向の問題について進歩的な見方を持つと言われている<sup>3</sup>。ミレニアルは人種や宗教の点で今までで最も多様な世代であり、多文化社会を受け入れる傾向が強いとされる。1980年代から共和党保守派を支えてきた宗教右派のなかでさえジェネレーション・ギャップが生じ、アメリカがキリスト教の国だとする意識が強いベビーブーマー世代と比べて、ミレニアル世代は宗教の多様性を認めているという指摘もある<sup>4</sup>。

しかしながらアメリカ史のなかで「世代」は、それほど強い概念ではない。なるほど、アメリカの歴史における有名な世代を挙げることは容易い。1920年代の文化人を中心とする「失われた世代」、第二次世界大戦に身を投じた「GI世代」、1950年代の「沈黙の世代」に、1960年代の「ベビーブーマー世代」。その後も「X世代」や「Y世代」が続き、ミレニアル世代が登場する。だが、アメリカ史では人種、エスニシティ、宗教、ジェンダー、階級、地域などの分析概念が重要であり、それほどの影響力が世代概念にあるのか疑わしい<sup>5</sup>。たとえば、2012年と2016年の大統領選挙における投票データを分析したデボラ・シルトクラウトとセイシャ・マロッタは、たしかにミレニアル世代の白人がベビーブーマー世代の白人よりも若干リベラルな傾向を持つことを確認したが、ミレニアル世代の白人を同世代の黒人やヒスパニックと比べると違いがより顕著となることを見出した。そのためシルトクラウトとマロッタは「政治的趣向を決める大きな要因は、世代よりも人種」だと結論づける<sup>6</sup>。そもそも、約20年間という時間幅のなかで生まれた数千万人を一つの集団として特徴づけることは難しいのかもしれない。

それでも、世代という言葉を見捨てることは有益ではないだろう。政治のなかで世代が注目を浴びるとき、その背景には何があるのかを考えることは重要である。人口動態の変化、戦争や経済不況など歴史的な変動、社会運動、技術革新など様々な要素が考えられるが、本論では党派性との関係から世代論を考えてみたい。

本稿では、保守的な学生を組織した団体「自由のための青年アメリカ人組

織」(Young Americans for Freedom, 以下 YAF) を取り上げ、1960 年代の世代言説をめぐる若者同士の対立を考察する<sup>7</sup>。このアプローチには 2 つの意味がある。第一に、多くの世代論が新旧世代のギャップに焦点を当てるのに対して、本稿の視角は一つの世代の内部にある差異に注目する意図がある。これと関連して第二に、1960 年代の保守派学生団体を分析することによって、世代論に見られる一面性を指摘することができる。メディアにおいても学術研究においても長い間、1960 年代はリベラルや左翼の時代と捉えられてきた。その時代には様々な社会運動が盛り上がり、既存のリベラリズムや政治体制に不満を持つ若者の政治参加が顕著に見られたが、ヴェトナム反戦運動や「民主主義を求める学生組織」(Students for a Democratic Society, 以下 SDS) などの左派が 1960 年代の若者や社会運動の記憶の多くを占めてきた<sup>8</sup>。さらに、1960 年代世代(あるいは 1968 年世代)と呼ばれるアメリカ人の表象は白人男性の大学生となることが多く、女性や労働者階級など様々な人々が後景に退けられると指摘されてきた<sup>9</sup>。したがって、政治的思想、人種、性別や階級によって限定された一面が過度に強調された世代言説を、保守主義の若者から観察することによって相対化することができよう<sup>10</sup>。

以下本文では、一次史料を用いながら、YAF の活動と「世代」に関わる問題を分析する。1960 年に設立された YAF は、60 年代を通して個人の自由、伝統的価値観、反共産主義のための運動に従事したが、保守派の若者が持った世代意識や、保守主義運動における世代間関係についても考察する。本論では特に 60 年代の初期と末期において YAF が誰と対立して、それぞれの時期の YAF が世代や若者という言葉を使ってどのような自己像を描いたかに注目していく。したがって本稿の目的は、保守的な若者の社会運動、イデオロギーの違いから現れる異なる世代論、そして 1960 年代世代の再考を含む、多層的な分析である。このように 1960 年代若者世代という歴史的な比較対象を通して、21 世紀のミレニアル世代をめぐる想像力を考える一助としたい。

## 2. Young Americans for Freedom (YAF) の創設

ブラックパワー、ヴェトナム反戦運動、ニューレフト、フェミニズムの新しい波、対抗文化などに彩られた1960年代にあって保守主義を標榜した学生団体YAF。ニューレフトに対するニューライトの中心的な団体は、一体どのような組織だったのか<sup>11</sup>。YAFの成立、ひいては第二次世界大戦後の現代アメリカ保守主義の発展にとって、ウィリアム・F・バックリー（William F. Buckley, Jr.）の存在は欠かせない。まだイエール大学の学生だったバックリーは1951年に『イエール大学における神と人間』を著し、保守派の若き理論家として登場した。その後バックリーは1955年に『ナショナル・レビュー』誌を創刊する（当初は『ナショナル・ウィークリー』として始まり、その後改名）。この保守系政治雑誌には、ウィテカー・チェンバース（Whittaker Chambers）やジェイムズ・バーナム（James Burnham）などマルキシストから転向した反共産主義者、ラッセル・カーク（Russell Kirk）など伝統的価値観を重んじる著述家、個人の自由や市場経済を強調するリバタリアンの論客が集まり、フランク・マイヤー（Frank Meyer）によって反共主義、伝統主義、リバタリアニズムの融合が試みられた。すでに『ヒューマン・イベント』や『ザ・フリーマン』など保守的な雑誌があったなかで、バックリーの『ナショナル・レビュー』は、保守主義を様々な価値観の寄せ集めから一つの思想へと形成させる際に中心的な役割を果たした<sup>12</sup>。

やがてバックリーは、保守主義を思想運動から政治運動へと進めるために、新しい活動団体を組織する必要があると考えた。特に若者の組織化が保守主義運動の未来には肝要だと考えられるようになる。その目的のため、たとえばテキサス州の大学生で保守系の雑誌『インディヴィジュアリスト』の編集者だったデイヴィッド・フランキ（David Franke）は『ナショナル・レビュー』にインターンとして採用された。また、ジョージタウン大学で保守派として活動していたダグラス・キャディ（Douglas Caddy）も、『ナショナル・レビュー』と関係の深かったコンサルティング会社〈マーヴィン・リーブマン・アソシエイツ〉に雇用される<sup>13</sup>。

1960年、バックリーはコネティカット州シャロンにある自身の邸宅に約

100名の学生を招き、9月9日から11日まで開催された会議においてYAFが発足することになる。新たな保守派団体についての議論は基本的に若者に委ねられたが、そこには『ナショナル・レビュー』に関係する年長者たちの間接的な影響が看取される。会議のおおまかな予定を立てたのはキャディであるし、会議での議論を主導したのはフランキで、バックリーの義理の弟にあたるL・ブレント・ボゼル(L. Brent Bozell, Jr.)は「なぜ保守政治の若者団体が必要なのか」というスピーチで政治運動としての保守主義を推進する必要性を訴えかけた。この会議のために保守派のジャーナリストだったM.スタントン・エヴァンズ(M. Stanton Evans)が起草した「シャロン宣言」が、YAFの理念と思想を表すことになった。「シャロン宣言」には伝統主義、リバタリアニズム、反共主義が含まれ、宣言の中では「神に与えられた自由意志を個人が行使」することは人間性の根幹であると述べられる一方で、自由市場と小さな政府の重要性が謳われ、さらに共産主義との闘いがアメリカ合衆国の使命であると説かれている。これらの思想は当時のアメリカ保守主義の主流でもあり、保守思想の形成に大きな役割を果たしていた『ナショナル・レビュー』の影響を示す証左でもあった<sup>14</sup>。

同年、〈マーヴィン・リーブマン・アソーシエイツ〉のオフィスを借りる形でニューヨーク市に本部を構えたYAFは、大学キャンパスや若者のあいだで保守主義を広げる運動を積極的に展開していった(本部は1962年にワシントンDCへ移動する)。ロバート・タフト(Robert A. Taft)を含む、1950年代までの共和党議員の右派が「オールドガード」と呼ばれていたことにちなんで、YAFは機関紙『ニューガード』を発行し、組織の活動を報告しながら保守思想を大学生のあいだに浸透させようとした。それと同時に、ニューヨークで政治集会を開くなど、ラリーやイベントを開催することで保守派の存在を示そうと試みた。わけても1962年3月7日に企画されたマディソン・スクウェア・ガーデンの政治集会には多くの保守派学生が集まり、アメリカ社会に保守主義の存在を認識させる上で効果があった。さらに、ルーマニア共産党政権とゴム取引を続けるファイアストーンを非難するなど、共産主義諸国と関係を持つ企業に対する反対運動もYAFの活動プログラムには含まれていた。それら全国的な運動だけでなく、それぞれのキャ

ンパスの支部が地域的な活動を行っており、草の根の保守主義団体として YAF は「政治活動」を重視した<sup>15</sup>。

YAF はその資金源を個人献金などに頼っていたために、その活動や理念を周知させると同時に資金を募るためのプロパガンダを、会員や、学生の親、ビジネス界や篤志家などに送っていった。そうした政治宣伝からも YAF の活動を窺い知ることができる。たとえば 1962 年 9 月に送られた宣伝によれば、当時 YAF は全米のキャンパスに 310 の支部を持ち、特に東部で保守派学生の組織化を進めていたが、中西部や南西部にも広がりつつあったという。ニューヨーク市だけでも YAF は 17 の活動に関わり、たとえばスタテンアイランド支部は第 15 選挙区のロバート・F・コナーを支援する一方、マンハッタンの諸支部はニューヨーク州下院のローズマリー・マクグラスの選挙運動に従事していた。このように YAF 会員たちは、選挙があれば地方、州、そして連邦レベルで候補者の陣営にヴォランティアとして加わり、保守政治の拡大に寄与しようとしたのである<sup>16</sup>。

保守的な大学生の組織化を目的とした YAF は、設立当初から「若者世代」としての自意識を明確に持っていた。「YAF の立ち上げ以来、この国の若者のあいだで起きている保守主義の台頭に全国的な注目が集まってきた」と、1962 年 9 月の手紙は宣伝し、アメリカ社会のなかでも大学キャンパスから保守主義が湧き起こっていると訴えた<sup>17</sup>。この若者という言葉が「世代」概念と強く結びついていたことは、他のプロパガンダからも確認できる。前述の 1962 年 3 月 7 日に開いたマディソン・スクウェア・ガーデンの政治集会を記録した映画が保守派によって制作され「ある世代の目醒め (A Generation Awakes)」とタイトルをつけられた。約 1 万 8,000 人が参加したと言われるこの集会では、バリー・ゴールドウォーター (Barry M. Goldwater) や、ジョン・タワー (John Tower)、ストローム・サーモンド (Strom Thurmond) など保守派の共和党上院議員が演説を行い、「その晩の素晴らしい演説と聴衆の熱狂のおかげで、ラリーは非常に成功した」と YAF のプロパガンダは喧伝した。YAF は 1960 年代初頭の保守主義を、単にそれ以前の反リベラル思想の延長線上にあるだけでなく新しい世代による運動として捉えていた、あるいは、そのように示そうとしたのだった<sup>18</sup>。

ちなみに団体名に「Young」という言葉を含む YAF は、どのように若さを定義したのだろうか。1960 年シャロン会議への参加者の多くが大学生や大学を卒業したばかりの 30 歳未満だったなかで、初めは団体加入者の年齢制限を 27 歳までに設定した。しかし、活動資金の多くを会員費でまかなう YAF は会員数を限定することを嫌ってか、やがて 35 歳、さらに 39 歳にまで延ばしていった<sup>19</sup>。

以上のような YAF の創設から活動初期の様子をたどってみると、現代アメリカ保守主義における年長世代と若者世代の親密な関係が見えてくる。そもそも YAF という学生団体の設立を企図したのはバックリーなどの保守派知識人であったし、〈マーヴィン・リーブマン・アソーシエイツ〉など保守政治に関心のある企業も YAF を財政的に支援していた。たとえ大学生と年長者との緊張が生まれることがあっても、『ナショナル・レビュー』誌の編集者たちは YAF 会員の思想的後援者であり続け、YAF も上の世代との協力が政治活動には必要だと認識していた。YAF が出したある政治広告は以下のように訴えたこともある。「学生は闘いに勝つための資金がない。私たちは親たちに頼らなければならないのだ」と<sup>20</sup>。

### 3. 「左派」と「保守派」：1960 年代初頭における NSA と YAF

このように、YAF は 1960 年に設立されて以来、保守主義を掲げて国内外の共産主義やリベラリズムに対抗する草の根運動を展開していった。その活動の初期段階において、YAF が大学キャンパスで特に標的としていたのは全国学生協会（National Student Association, 以下 NSA）だった。ここでは 1960 年代初期において YAF が発したプロパガンダを見ながら、若者の保守派団体がどのように自分たちの運動を捉え、若者世代としての政治意識を持っていたのか見ていきたい。

NSA は 1947 年にシカゴで設立された全国学生団体で、平和と民主主義の推進を目的とするリベラルの組織として知られていた。アメリカ合衆国とソビエト連邦との政治的緊張が高まると、多くのアメリカ人と同じように NSA は反共主義に賛同したが、ジョセフ・マッカーシー（Joseph

McCarthy) 上院議員を中心とする赤狩りが国内に吹き荒れたときには、学問の自由を主張して政治信条や人種にもとづく差別を批判していた。さらに1950年代の終わり頃にはNSAはより左派的な立場をとるようになり、アメリカによる核実験に反対し、キューバ革命を支持する声明を出し、南部で広がっていたシットイン運動を支えるために連邦政府の介入が必要だとも訴えた<sup>21</sup>。

YAFから見ればNSAはアメリカの大学生にリベラリズムを浸透させる組織として映り、保守派の大学生はNSAの全国会議に出席することで、この団体を内側から変えようとした。1961年8月にウイソコンシン州マディソンで開かれた会議にはYAFの会員も参加したが、彼らが求めた保守的な主張は結局NSAに採用されることはなかった。実際のところ、NSAのニューレフトやリベラルもYAFを警戒していた。たとえばSDSのアル・ハイバー(Al Haber)はNSAのリベラルな学生に手紙を送って、8月の会議では保守派の声明を制限するよう求めており、YAFを人種差別主義者やミリタリストの団体と関係していると話していた。こうして、1960年代初めにはYAFとNSAという、対称的な政治的理念を持つ組織の間で対立が深まっていったのである<sup>22</sup>。

1960年代初頭にYAFが発信した情報にはNSAとの争いが現れるが、この時期のYAFには「左派」に対抗する「保守派」の闘いという自己認識が強かった。「アメリカの学生は本当に左へ移り動いているのだろうか?」と、ある手紙は問いかける。このYAFのプロパガンダはNSAを指しながら、「100万人の学生を代表すると言い張っている全国組織は、我々にそう思わせる」として、NSAに対する危惧を語った。YAFによると1962年のNSA全国会議では、キューバにおけるピッグス湾事件への合衆国政府の関与を非難し、スペインや南アフリカなどの国に対する援助の停止、1950年マッカーラン国内治安法による市民権の侵害を訴える決議をとり、NSAは国外の共産主義に対して親和的で、国内の反共主義的な政策には反対する姿勢を示した。さらにYAFは、NSAの全国会議にはアメリカ共産党員やその他の「アカ」の指導者が現れていたと訴えて、NSAが左翼団体であると主張したのである<sup>23</sup>。



「しかしNSAは危機にある」と、YAFの政治広告は述べる。1962年から1963年にかけて、YAFはNSAを大学キャンパスから追放するキャンペーンを始めた。「この数ヶ月間、多くの学校がNSAから身を引き、他の多くもそうすることを考えている」というYAFの宣伝には疑問符をつけざるをえないが、こうしたNSAという他者を通して、YAFは自らの活動を「左派」と「保守派」によって規定される政治スペクトルに位置づけたのである<sup>24</sup>。NSAと同様に、学生平和運動や、社会主義団体、左翼に協力的な大学教員もまたYAFが標的とする対象だった。こうした左翼に属する組織や人々は「若い学生の心を一心不乱に捕らえようとする」者たちであり、「彼らの試みにYAFは身を挺して対抗している」とプロパガンダでは語られた<sup>25</sup>。

1960年に大学生のあいだで保守主義を広めるために創設されたYAFが自らを「保守派」の団体と認識することは自明であり、したがって政治的敵対者を「左派」や「左翼」と捉えるのは当然のことだったろう。しかしながら、「新しい左翼」として台頭したSDSと対峙する1960年代末から1970年代初頭には、上のようなYAFの自己認識は急速に変化していった。

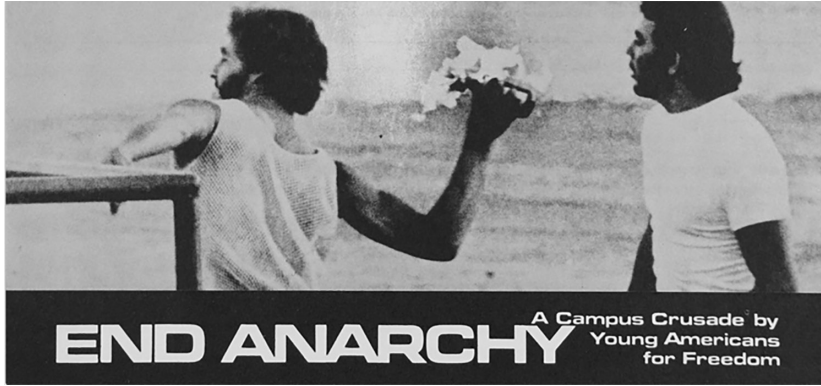
#### 4. 「過激派」と「世代の多数派」：1960年代末におけるSDSとYAF

1960年代に大学生が主体となった政治団体としてYAFとSDSはしばしば比較対照されるが、2つの組織は時を同じくして誕生した。社会民主主義的な団体「産業民主主義連盟」の学生組織だった「産業民主主義学生連盟」(Student League for Industrial Democracy)が、1960年にSDSと改名された。1962年6月のSDS全国大会においてトム・ヘイドン(Tom Hayden)が起草した「ポート・ヒューロン宣言」が採択されたとき、アメリカのニューレフト運動が生まれたといわれる。旧世代の左翼にみられたような中央集権的な組織形態はとらず、ニューレフトは各支部のゆるやかな連合として脱中心的な運動を推進しようとした。黒人の市民権運動から非暴力の運動スタイルを取り入れながら、直接行動を通じた「参加民主主義」を目指したニューレフトは、60年代前半には民主党リベラルの革新を目標として、親組織の産業民主主義連盟がとる反共主義的な立場からは離れていった<sup>26</sup>。

1960年代半ばから後半にかけて、多くの学生がフリースピーチ運動やヴェトナム反戦運動に加わりニューレフトの運動が急進化して民主党政権や既存の政治体制を厳しく批判するようになったとき、YAFはSDSに対してすぐさま反応したわけではなかった。YAF全国本部ではニューレフトに関する議論はなされたが、SDSに対抗する政治活動には消極的だったのである。その理由は、1960年代後半のYAF本部の注目が東南アジアのヴェトナム戦争に向けられており、アメリカ国内の動きは優先度が低かったせいとされる。1968年の春においてさえ、YAFの本部でニューレフトや人種暴動について議論されたとき、ヴェトナムでの勝利をYAFの中心的問題にし続けると決定した<sup>27</sup>。

しかしながら、SDSへの対応に積極的ではなかったYAF本部を尻目に、地方の会員たちはそれぞれの大学キャンパスで急進化していくニューレフトを無視することはできなかった。YAFに属する学生たちにとって、反戦運動に参加する学生は異なるイデオロギーの持ち主であるだけでなく、大学の自由と秩序を脅かす存在なのであった。YAF会員の目には、SDSや他のニューレフトは大多数の学生に迷惑を被らせる暴力的な「過激派」(extremist, militant)でしかなかった。そして興味深いことに、ニューレフトに対抗した1960年代末から1970年代初頭において、YAFは「保守派」というより「多数派」という自己描写を前面に押し出していったのである。

1969年、YAFのニューヨーク州議長を務めていたジェームズ・ファーリー(James Farley)は、ニューヨーク州にあった70の地方支部と3,000人の会員を代表して、ニューレフトに反発する学生の組織化を告知した。「学問共同体の人々は暴力の対象にされることもなく勉学に専念したいと願っている。その権利を不法に犯すことは、過激派のマイノリティには決して許されない」。こう宣言したファーリーは「多数派の連合」を形成するよう他の学生たちに促し、共和党や民主党の青年部、大学の運動部、研究者など大学閉鎖に反対する人々とYAFとの協力関係を築こうとしたのであった。「これは、少数派のラディカルレフトに立ち向かう、教育のために学校に通っている大多数の学生の問題だ」と言い加えて、ファーリーは左翼と保守との争いではなく、少数派と多数派の対抗軸を強調したのである<sup>28</sup>。



Appeal, Ronald F. Docksai, n.d., box 39, folder 8 "Form letters, 1971-1998," YAF Records, HIA.

マスメディアの中でもニューレフトに批判的なものは、YAFを多数派の一部として表現した。SDSの政治集会に合わせてYAFが組織した対抗ラリーを取材した保守系雑誌『マーキュリー』は、保守派学生を撮影した写真に「ついにサイレント・マジョリティが立ち現れた」とキャプションをつけた。1969年にリチャード・ニクソン政権が用い始めた表現を使うことで、SDSとYAFの対立からイデオロギーの色彩を落とそうとしたといえる<sup>29</sup>。警察との衝突を繰り返すSDSが暴力的な少数派とされる一方で、YAF会員や保守的なメディアは保守派学生を「平和な若者」、「法と秩序の勢力」などと形容することによって、YAFを正常な運動として示そうと試みたのである<sup>30</sup>。

やがてSDSとの対立へと方針転換したYAF本部も、同じように物言わぬ多数派として自らを表現し、ニューレフトと自己を対置した。「共産主義者の中核的な煽動者たちと並んで、ニューレフトはアメリカの生活のあらゆる部分を急進化させようとしている」と、YAFはニューレフトの危険性を訴えかけた。YAFのプロパガンダによれば、ニューレフトの影響は政府や企業、郊外の家庭に及んでいただけでなく、大学や高校さらに中学も狙われていると考えられ、軍隊をも蝕んで兵士のあいだに厭戦気分を蔓延させているとした。ここでは明らかにニューレフトの影響力が過剰に描かれているとしても、そうした勢力に対抗する学生の重要さを際立たせようとするYAFの意図は明確だった。キャンパスの中で政治集会を開いたり建物を占拠したり

する大学紛争は国家的な危機なのであって、ニューレフトと戦おうとする者たちは「穏健な学生という『サイレント・マジョリティ』」なのだとされた。このプロパガンダには、YAFを指す言葉として「穏健」や「多数派」などが用いられても、「保守派」という党派的な用語は一切使用されていない<sup>31</sup>。

YAFのプロパガンダでは学生や若者の主体性が描かれるが、それらが「世代」と結びついて、未来や変化の概念へとつなげられる例も多い。「我々、30歳以下の世代は、学校を守るために身を投じています」と、あるYAF支部のメンバーは自分たちの活動を語るように、ニューレフトと同じく保守派学生もまた若者世代としての意識を強く持っていた<sup>32</sup>。保守系メディアもYAFを指して、「もし若者の中でこうした健全さと責任がほとぼり続ければ、わが国の未来には希望が持てるだろう」と、その活動を称賛し、多数派の学生の動きがアメリカ社会の将来を予期させるものと捉えた<sup>33</sup>。1969年2月にミズーリ州YAF大会が開かれると、地元紙『セントルイス・グローブ・デモクラット』の社説は、保守的な学生をあえて「反逆者」だと書いた。「若者がいつもそうであるように、YAFのメンバーは反逆者だ。しかし彼らは大義ある反逆者である……彼らの大義は責任を伴う自由であり、公共の問題への知的な関与、そして彼ら世代が直面する問題に対する直接行動なのだ」と<sup>34</sup>。こうした言説では、世代＝若者＝変化という図式が成り立ち、イデオロギーではなく未来への希望によって保守主義運動を正当化しようとしている。

ただし、YAFの場合、世代概念は新旧世代の違いを深めるよりも協力を促すために用いられていたことに注意する必要がある。保守派ラジオホストで知られていたクラレンス・マニオン（Clarence Manion）の署名入りの手紙は、親世代に向けて、YAFへの援助および若者との協働を求めた。「もしあなたの息子や娘が、法と秩序を守ろうとしたがために、SDSのフリーガンから暴行を受けたり命を脅かされたりしたのなら、あなたはきっと懸命に戦い、すぐに行動をとろうとするでしょう」と、マニオンの手紙は語りかける。「責任ある大人として私たちには、キャンパスの自由を保とうと戦い苦しむ素晴らしいアメリカの青年を守る義務があるのです」<sup>35</sup>。1960年代末においても世代という概念の使い方は、SDSとYAFとのあいだでは大きく異なっていた。

以上に見てきたように、YAFは自分たちこそが若者世代の多数を代表する団体であり、SDSは過激な少数派に過ぎないと矮小化しようとした。しかしその試みは成功したとはとても言えないだろう。YAF自身もSDSとの対立のさなか以下のように吐露した。「ニュースメディアは多くの注目をニューレフトの急進派に向けているが、それと比べて、自由のための青年アメリカ人組織にはほとんど言及がない」<sup>36</sup>。結局のところ、1960年代当時においても、それ以降も、SDSやニューレフトがその時代を代表する政治的な若者として取り上げられてきたのであり、YAFは歴史のスポットライトからは外されてきた。その結果、1960年代は対抗文化やニューレフト、ブラックパワーの時代として長く記憶されることとなる。

## 5. おわりに

「明日のリーダーたちは保守派となるだろう、もしYAFのような組織が今日影響を与えることができたのなら」<sup>37</sup>。1960年に保守派の知識人や実業家の援助の下で設立したYAFは、保守主義を政治運動として展開させ、未来のアメリカ政治を変容させる学生団体として期待された。1960年代に大学生が主体となって活動した政治団体として、SDSとYAFはしばしば比較対照されるが、両者は第二次世界大戦後の時代におけるリベラリズムへの不満の表出という意味では共通している。だが前者はニューレフトとして、後者は保守派として既存の政治に挑戦し、そうしたイデオロギーの違いに加えて世代意識も異なり、SDSは旧世代との決別から若者世代としての自己意識を強め、YAFは新旧世代の連続性を保ち続けながら若者世代としての運動を行なった。

YAFが古い世代に対してというより、同世代の対抗組織に向かって「世代」を語ったとき、若者の新しさを強調することとは別の効果があったことが確認できる。SDSと対決したときのYAFは自分たちがベビーブーマー世代の多数派を代表していると主張したが、左右の政治的衝突からネガティブな党派性を脱色する言葉として「世代」が使われたといえる。第二次大戦後から成長した保守主義と、ヴェトナム戦争を期に急速に拡大したニューレフ

トが民主党リベラリズムを攻撃した政治対立の強い1960年代という時代に、世代という用語は従来よりも強い概念として立ち現れたのである。

2020年現在のミレニアル世代に戻れば、ドナルド・トランプという異色の大統領の時代においてリベラルな傾向の強い新しい世代に注目する言説が強まっている現象には、あらためて考察する価値がある。2020年大統領選挙は反リベラル色の強い政権に対する社会民主主義の挑戦になるかもしれないし、古い世代から新しい世代への価値観の塗り替えをもたらすかもしれない。しかしどのような解釈をとるにせよ、ミレニアルという巨大なコーホートの中から一部の人々を切り取り、その特徴を過剰に一般化するべきではない。これまでで最も多様な世代の分析は、より慎重で精密な調査を必要とするはずである。

## 註

<sup>1</sup> Charlotte Alter, *The Ones We've Been Waiting For: How a New Generation of Leaders Will Transform America* (New York: Viking, 2020). バラク・オバマのスピーチは、wearetheones0, "Obama 'We are the ones we have been waiting for,'" YouTube Video, 0:15, February 19, 2008, <https://www.youtube.com/watch?v=mo1WTFv8TYw>.

<sup>2</sup> William Strauss and Neil Howe, *Generations: The History of America's Future, 1584-2069* (New York: Quill, 1991); Neil Howe and William Strauss, *Millennials Rising: The Next Great Generation* (New York: Vintage Books, 2000). 以下も参照、Paul Taylor, *The Next America: Boomers, Millennials, and the Looming Generational Showdown* (New York: Public Affairs, 2014).

<sup>3</sup> Ange-Marie Hancock, *Solidarity Politics for Millennials: A Guide to Ending the Oppressing Olympics* (New York: Palgrave, 2011).

<sup>4</sup> Kit Kirkland, "Mere Republicanity? How Millennials Are Changing the 'Christian Right,'" *Political Theology Today*, December 9, 2014, <https://politicaltheology.com/mere-republican-ty-how-millennials-are-changing-the-christian-right-pt-1/>.

<sup>5</sup> Norman B. Ryder, "The Cohort as a Concept in the Study of Social Change," *American Sociological Review* 30, no. 6 (December 1965): 843-861; Alan B. Spitzer, "The Historical Problem of Generations," *American Historical Review* 78, no. 5 (December 1973): 1353-85.

<sup>6</sup> Deborah J. Schildkraut and Satia A. Marotta, "Assessing the Political Distinctiveness of White Millennials: How Race and Generation Shape Racial and Political Attitudes in a Changing America," *RSF: The Russell Sage Foundation Journal of the Social Sciences* 4, no. 5 (August 2018): 159.

7. Young Americans for Freedom については、たとえば以下を参照。John A. Andrew, *The Other Side of the Sixties: Young Americans for Freedom and the Rise of Conservative Politics* (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1997); Gregory Schneider, *Cadres for Conservatism: Young Americans for Freedom and the Rise of the Contemporary Right* (New York: New York University Press, 1998); Klatch, *A Generation Divided*. 保守派活動家たち自身も YAF について記述している。William A. Rusher, *The Rise of the Right* (New York: William Morrow, 1984); Lee Edwards, *The Conservative Revolution: The Movement That Remade America* (New York: Free Press, 1999); Liebman, *Coming Out Conservative: An Autobiography* (San Francisco: Chronicle Books, 1992)。また、YAF は参加者からは「イエフ」と発音されていたことが、たとえば以下のようなオーラルヒストリーから確認できる。Sound recordings 215, “Lee Edwards interviews Richard Viguerie on 5 Feb 1992,” part I, Lee Edwards Papers, Hoover Institution Archives (HIA)。

8. たとえば、油井大三郎編『越境する 1960 年代——米国・日本・西欧の国際比較』（彩流社、2012 年）；西田慎・梅崎透編『グローバル・ヒストリーとしての「1968 年」——世界が揺れた転換点』（ミネルヴァ書房、2015 年）；I. ウォーラーステイン『ポスト・アメリカ——世界システムにおける地政学と地政文化』丸山勝訳（藤原書店、1991 年）；T. ギトリン『60 年代アメリカ——希望と怒りの日々』疋田三良・向井俊二訳（彩流社、1993 年）；David R. Farber, ed., *The Sixties: From Memory to History* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1994); Robert Cohen, *Freedom's Orator: Mario Savio and the Radical Legacy of the 1960s* (Oxford: Oxford University Press, 2009); Anthony Ashbolt, *A Cultural History of the Radical Sixties in the San Francisco Bay Area* (Brookfield, VT: Pickering & Chatto, 2013); Penny Lewis, *Hardhats, Hippies, and Hawks: The Vietnam Antiwar Movement as Myth and Memory* (Ithaca, NY: ILR Press, 2013)。

9. たとえば以下を参照。Sara M. Evans, *Personal Politics: The Roots of Women's Liberation in the Civil Rights Movement and the New Left* (New York: Knopf, 1979); idem, “Sons, Daughters, and Patriarchy: Gender and the 1968 Generation,” *American Historical Review* 114, no. 2 (February 2009): 331-47。

10. 筆者の管見では、1960 年代の保守主義を世代論から分析した学術研究は少ない。Rebecca E. Klatch, *A Generation Divided: The New Left, the New Right, and the 1960s* (Berkeley: University of California Press, 1999); June Melby Benowitz, *Challenge and Change: Right-Wing Women, Grassroots Activism, and the Baby Boom Generation* (Gainesville: University Press of Florida, 2015)。

11. 1969 年に M. スタントン・エヴァンズがニューレフトの活動家と争う保守派学生を「ニューライト」(New Right) と呼んだという。ただし、その用語は 20 世紀を通して何度か使用され、1960 年代の保守派学生運動のみを指すわけではない。ケヴィン・フィリップスによれば、①リチャード・ウィーヴァーなど 1940 年代の保守的知識人、② 1950 年代初頭のマッカーシー運動の支持者、③ウィリアム・バックリーや『ナショナル・レビュー』関係者、④草の根反共主義団体「ジョン・バーチ協会」、⑤アーヴィング・クリストルの新保守主義、⑥リバタリアン、⑦リチャード・ヴィグリーやポール・ワイリクなどの 1970 年代右派ポピュリストが現れるたびに、ニューライトと呼称された。Richard A. Viguerie and David Franke, *America's Right Turn: How Conservatives Used New and Alternative Media to Take Over America* (Chicago: Bonus Books, 2004), 53; Allan J. Lichtman, *White Protestant Nation: The Rise of the American Conservative Movement* (New York: Atlantic Monthly Press, 2008), 308。

12. 『ナショナル・レビュー』の概要については、以下を参照。George H. Nash, *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945* (New York: Basic Books, 1976), 197-233; idem.,

*Reappraising the Right: The Past and Future of American Conservatism* (Wilmington, DE: ISI Books, 2009), 202-24; John Judis, *William F. Buckley, Jr.: Patron Saint of the Conservatives* (New York: Simon & Schuster, 1988); Jeffrey Peter Hart, *The Making of the American Conservative Mind: National Review and Its Times* (Wilmington, DE: ISI Books, 2005); David B. Frisk, *If Not Us, Who? William Rusher, National Review, and the Conservative Movement* (Wilmington, DE: ISI Books, 2011).

13. マーヴィン・リーブマン・アソシエイツは、ニューヨーク出身のユダヤ系だったマーヴィン・リーブマン (Marvin Liebman) が設立した資金調達・団体運営のためのコンサルティング会社で、特に反共主義や保守主義に関与していた。リーブマン自身も「百万人委員会」(the Committee of One Million) を設置して中華人民共和国の国際連合加盟に反対する活動などを行なったが、1950年代から1960年代にかけて胎動していたアメリカ保守主義に対する資金援助で大きな役割を果たしていた。リーブマンに関する詳細は以下を参照されたい。Takahito Moriyama, "Conservatives on Madison Avenue: Political Advertising and Direct Marketing in the 1950s," *Nanzan Review of American Studies* 41 (2019), 3-25.

14. Andrew, *The Other Side of the Sixties*, 53-74; Schneider, *Cadres for Conservatism*, 31-38; Klatch, *A Generation Divided*, 97-133.

15. Lichtman, *White Protestant Nation*, 241; Andrew, *The Other Side of the Sixties*, chap. 4; Peter Kihss, "18,000 Rightists Rally at Garden," *New York Times*, March 8, 1962, 1; Foster Hailey, "Liberals Decry All 'Extremists,'" *New York Times*, March 8, 1962, 20.

16. Appeal, Richard Viguerie, September 1962, box 41, folder 6 "1960-1969," Young Americans for Freedom Records, HIA.

17. Ibid.

18. Appeal, Richard Viguerie, March 29, 1962, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

19. Andrew, *The Other Side of the Sixties*, 56-57.

20. Direct Mail, David R. Jones, September 7, 1969, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

21. Andrew, *The Other Side of the Sixties*, 91-101; Schneider, *Cadres for Conservatism*, 60-64.

22. Schneider, *Cadres for Conservatism*, 61-62.

23. Appeal, Richard Viguerie, n.d., box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA. この政治広告が出された時期は、以下の史料から1963年の春から夏であると特定することができる。YAF Fundraising Packages (1960-Present), box 46, folder 1 "Financial Records, 1970-1973," YAF Records, HIA.

24. Appeal, Richard Viguerie, n.d., box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

25. Appeal, Richard Viguerie, December 5, 1962, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA; Appeal, Richard Viguerie, December 17, 1962, *ibid.*

26. アメリカのニューレフトおよびSDSについては、たとえば梅崎透「「すわり込み」から『ポー



トビューロン宣言』へ——ニュー・レフト運動の形成に関する一考察（1960年・1962年）』『アメリカ研究』33（1999年）：171-190頁；梅崎透「アメリカ「六〇年代世代」の形成——第二次世界大戦後の世代をめぐる政治」『歴史評論』698（2008年）：58-72頁。以下も参照、Blake Slonecker, *A New Dawn for the New Left: Liberation News Service, Montague Farm, and the Long Sixties* (New York: Palgrave Macmillan, 2012); Kristin Mathews, "The Medium, the Message, and the Movement: Print Culture and New Left Politics," in *Pressing the Fight: Print, Propaganda, and the Cold War*, ed. Greg Barnhisel and Catherine Turner (Amherst and Boston: University of Massachusetts Press, 2010), 31-49.

27. Schneider, *Cadres for Conservatism*, 112.

28. "YAF Will Oppose College Takeover," *YAF in the News* 1, no. 6 (Mid-June 1969), 1.

29. "Silent Majority Finally Speaks," *YAF in the News* 1, no. 6 (Mid-June 1969), 2.

30. *Ibid.*, 2; "Protesting Protests," *YAF in the News* 1, no. 6 (Mid-June 1969), 13.

31. Appeal, David R. Jones, September 7, 1969, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

32. *Ibid.*

33. "Silent Majority Finally Speaks."

34. "'YAF Just Possibly, Will Influence the Political Future of This Country,'" *YAF in the News* 1, no. 6 (Mid-June 1969), 10.

35. Appeal, Clarence Manion to Maria L. Berges, October 22, 1969, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

36. Appeal, Herbert A. Philbrick to Jorge E. Ferrer, July 31, 1970, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.

37. Appeal, Richard Viguerie, December 24, 1962, box 41, folder 6 "1960-1969," YAF Records, HIA.